Fate/stay night～光と影を従える者～

門矢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ～光と影を従える者～

【Ｎコード】
Ｎ７３３５Ｚ

【作者名】
門矢光

【あらすじ】
此は光と影を従える少年が半人前の魔術師の少女に会う話。Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの二次小説です。作者は全ルートクリアしましたが、曖昧な部分がありますのでご了承ください

サーヴァント始めました（前書き）

一話目

サーヴァント始めました

此処は……何で俺は浮いているんだ？確か学校が終わってダチとカードショップで遊戯王して、ヴァンガードのパック買って楽しみにしながら帰ってそれから……思い出せない

「君はしんだのじゃよ。泉恭矢」

「はあ？俺が死んだ？マジかよ……新パック中身が気になるじゃんかよ」

は～中身がホントに気になるよ。

「まあ、君は絶対に死ぬとわかってて小さな子供を助け死に世間では小さな英雄と呼ばれてる」

「絶対に死ぬとわかってて……思い出した。」

俺はカードショップから出てからダチと帰ってると信号無視の車が小さい子供を弾こうとしていた。周りは見て見ぬふりをしていた。何故か助けても自分が死ぬからだ。俺は気づくと体が動いており、小さな子供を突き飛ばし、目の前にトラックが迫っていた。此は死んだな。俺はトラックに弾かれて地面に激突。そして周りがざわめきだし、最後に見たのはダチの泣き顔と助けた子供の泣き顔だった。

「思い出したようじゃな」

「ああ。まあ後悔してないと言ったら嘘だけど悔いは無いよ。」

「君をある世界に飛ばそうと思うのじゃが、能力は何がいいかの～？」

ゼルレッチがそんなことを言っていた。うーん。何にしようか？アーチャーの力？嫌ダメだろ。ＦＦ？何かやだ。ドラクエ？チートだろ。あれにしよう！

「先導者〈ヴァンガード〉の力をくれ！」

俺はヴァンガードの力を望んだ。まあ使うことは無いし良いんじゃね？護身用

「そんなので良いじゃな？では飛ばすぞ。」

すると足下に黒い穴が出来俺は落ちていった

「糞野郎ぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

今度会ったら絶対に殴り飛ばしてやるからな！ゼルレッチ！

？？？サイド

「逃げてるだけじゃ、俺からは逃げられねーぜ」

あたしは紅い槍を持った、全身タイツの男から逃げていた。一体何があったの今日は帰ってきたら。士郎は胸に血がついてるし！何か家には全身タイツの男は居るし。金髪の少女は居るし！あたしは走ると石に躓き、倒れてしまった。

「いつっ！」

「嬢ちゃん悪いな、殺したくは無いが、見られたからには死んでもらう」

「汐里！セイバー汐里を助けてくれ！」

「間に合いませんマスター！」

「くそ！」

全身タイツの男はあたしに槍を突き刺そうとしたら、あたしの目の前が光だし、あたしは誰かに抱き抱えられ

「アビス・ヒーラーでガード！コール！ブラスター・ジャベリン！ドランバウ！黒の賢者カロン！」

あたしの目の前には全身タイツの攻撃を受け止める女性と黒い鎧を着て槍を持つ男と赤い犬に男か女かわからない可愛い子がいた。あたしは自分を抱き抱える人を見ると黒い髪でボサボサだが顔だちも整っていてカッコいい系の男の子だ。歳は見た目的にはあたしとたいして変わらなそうだ。相手を真剣な目で睨み付けているがあたしの視線に気がついたのか、あたしを見て

「大丈夫か？」

心配そうな目で優しく語りかけてくれた。

「大丈夫です」

「そうかなら良かったよ。」

彼はそう言って微笑んでいた。

恭矢サイド

取りあえずは茶髪赤毛の少女は救出完了

「貴様は何者だ！何で八体目のサーヴァントが居るんだよ！」

「さあな……知るか。黒き闇の剣よ、今現れて敵を切り裂け！俺にライド！俺の分身！ブラスター・ダーク！」

俺の身体が黒く光だし、黒い鎧に黒い剣が装備された。此がブラスター・ダークか……力がわいてくる。しかし上手く扱えるのか？いや、イメージしろ！ブラスター・ダークの戦い方を！俺は剣を構えてランサーに斬りかかる。ランサーはゲイ・ボルクで防いできた。剣が弾かれ、ランサーの槍が俺を狙うが、サイドステップで回避し、袈裟斬りを放つ。ランサーはガードしたが、壁まで吹き飛ばされる。ジャベリンが追撃しようとしたが、俺が剣で通行止めして下がらせた。召喚した理由は女の子の護衛だしさ。俺は剣構えて左から振りかぶるランサーはバックステップで避けて槍を構え直す。

「騎士を喚んだり、騎士になったり。貴様は何者だ！」

「俺は導く者……先導者〈ヴァンガード〉！」

「ヴァンガードか……行くぜ！」

「こい……」

俺はランサーが放ってきた槍を裁く。そして回し蹴りを放つ。ランサーは予想外な攻撃に反応出来ず脇腹にクリーンヒットした。

「ヴァンガード！貴様に騎士としての自覚は無いのか！」

「無いな。俺は騎士ではなく、ヴァンガード。導く者だと言っただろ？騎士の誇りやプライドはない。更に俺が今導いている奴等は影の騎士、シャドーパラディンだ。騎士としてやっちゃいけないことばかりしてきた奴等だ。わかったかクランの猛犬？」

すると、ランサーの目がつり上がる。場の空気も冷たくなった。

「ほ～お、何故俺の真名がわかったんだ？ヴァンガードよ」

「その禍々しい紅い槍がゲイ・ボルクだとわかってるからだよ。クー・フーリン。確か死因は自分の誓いを破って、木に張り付けされたんだっけ？ご愁傷さま。詳しく言ったほうがいいが？」

「言わなくていい！」

ランサーの槍のスピードが更に早くなる。しかし動きが単調になっていた。

「クランの猛犬はそんなものかよ！」

俺は剣でゲイ・ボルクを上に払い除けて大きく剣を振り下ろす。

「ぐうぅぅぅ、やるじゃねえか！」

「ああ……」

俺は人を斬っちまった。始めて斬ってしまった。なんだよあの感触……やばい吐き気がしてきた。まだ堪えろ俺！戦いは終わってない！俺が剣を構えるとランサーは体勢を低くしたが、突然立ち上がり、

「悪い。俺のマスターがお呼びでな。じゃあなヴァンガ「恭矢だ」何！」

「ヴァンガードじゃない。泉恭矢だ。俺だけ名前を知っててても不公平だ。それに相手が俺の名前を知っててても余り意味無いからな」

「そうかなら恭矢。次に会う時を楽しみにしてるぜ」

ランサーがその場を去ると、俺はリアガードを退却させてユニットを解除すると、その場に座り込み吐き出して震えた

「俺は……人を……斬っちまった」

「大丈夫ですか？」

「君はさっきの！」

「あたしは衛宮汐里。貴方は？」

「君のサーヴァント。ヴァンガードだ。後大丈夫だ」

「でもまだ震えてるし、泣いてるよ」

「問題ない」

「問題なくないよ。何で辛いとか言えないの」

「何故言わなければいけない？君には関係ないだろ？」

「助けてもらったから。」

「え？」

「さっき君に助けてもらったから！だから今度はあたしが君を助ける！」

汐里は真剣な目で俺を見ていた。何この女士郎。

「たよりないけど、少しは辛さは和らげることはできるから」

そう言って俺を抱き締めてくれた。少しはいいよな。俺はそこで声を殺して泣いた

サーヴァント始めました（後書き）

NG話

「俺はこいつをライド！」

俺の目の前には騎士甲冑を付けたシグナムがいた

「何でだよ！」

俺はカードを見ると……

「ヴァイスじゃねーか！確かにブシロードだけどさ！」

「おい……何一人でツッコンでるんだ？」

「気にしないでくれランサー……」

こんなネタを思い付いていた俺でした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7335z/

Fate/stay night〜光と影を従える者〜

2011年12月24日11時49分発行